
聖夜のラブストーリー

綾未玲 奏音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜のラブストーリー

【Nコード】

N8154Z

【作者名】

綾未玲 奏音

【あらすじ】

キミに少しでも「好き」が届きますように……。クリスマスの恋愛短編集。一話ずつ読み切りです。

夕日の笑顔（前書き）

クリスマスぎりぎりの投稿です。

夕日の笑顔

「来てくれるかなあ……」

ひんやりした空気が、頬をなでる。

わたし、花織はなおり 桃ももは、窓際に体をもたれかけながら、ぼつりとつぶやいた。

誰もいないから、声が反響して、余計に不安になる。

わたしが待っているのは、今日、自分に存在しているだけの勇気を
出して呼び出した、戸野上とのがみ 恭きょうつ。

そして、不安になっている理由は、これから戸野上君に、告白をす
るつもりだからだ。

来てくれなくては、何もかも始まらない。それどころか、わたしの
片想いは終わってしまう。

さつきから、何回ため息をついただろう。
でも、これだけはわかる。

こんなに悩むほど、わたしは戸野上君の事が好き。

初恋だから、余計にだ。

話は、高校に入学した時までさかのぼる……。

「桃、本当に図書委員になるの？」

クラスで、委員会決めをしたあとの事。

教室を出て、下の階の職員室に向かいながら、友達の加奈実が、わ
たしに聞いてきた。

「うん、もう決まったしね」

わたしは、図書委員に立候補して、無事その座を獲得した。
どうやら加奈実は、それが不安らしい。

「アンタ、図書委員って、ぼーっとしていれば済むわけじゃないの
よ？ 何かしでかしちゃいそうで、桃が心配だよ」

階段を下りながら、加奈実は声のトーンを落とした。

加奈実の心の声がする。要するに、「やめといた方がよかつたんじゃない？」って言いたいんだろう。

確かに、加奈実の言うとおり、委員会は決して楽じゃないと思う。だけど……。

「わたし、もう高校生だから。大人になるの」
ニコツと、加奈実にはほほ笑みかける。

「大人って……」

「だから安心して。加奈実に不安がられるような事はしないから」
加奈実だけを見つめながら、胸を張って宣言した。

わたし今、なかなかカツコイんじゃない？

自分が、ちよつとだけキラキラしたオーラに包まれているような気になりながら、わたしはさらに笑顔になった。

しかし、その堂々とした態度も、次の瞬間に変わった。

足元を見ていなかったせいで、階段を踏み外したのだ。

「ちよ、ちよつと、桃！」

あわてて加奈実が手をのばしてくれたが、わたしの腕はつかまらず。思い切り階段の下に落ちた……かと思つたが。

バランスを崩したわたしの体は、誰かに受け止められていた。

「大丈夫？」

「あ……は、はい！ 大丈夫です！」

わたしはその人から離れ、頭が床につくくらい深いおじぎをした。

「顔上げてよ。なんか緊張するから」

頭上から、笑いを含んだ明るい声がする。

おそろおそろ顔を上げると、そこにはとても「美形」の男子がいた。その人は白い歯を見せて笑うと、

「気をつけなよ、ケガしちゃ大変だからさ」

と、わたしの頭をポンとたたいた。

ぽけつとしているわたしの横をすり抜ける男子に、あわててもう一度頭を下げた時、わたしの頭は混乱状態だった。

それから、その人の名前が「戸野上 恭」だという事や、わたしと同じクラスだという事を知った。

そして、戸野上君とわたしは、同じ図書委員。

彼は、誰にでも優しく、誰にでも笑顔で接するため、生徒にも先生にも先輩にも人気だった。

そんな人の隣で仕事をしながら、わたしはいつもあの笑顔に見とれていた。

そしてだんだん、名前を呼ばれた時。

プリントを落として、拾ってもらった時。

図書の本を運んでいたら、何も言わずに半分持ってくれた時。

全ての戸野上君の行動に、惹かれていく自分に気付いた。

加奈実に「それは恋だよ」と教えてもらうまでは、この気持ちの名前も知らなくて。

でも、教えてもらう前から、この気持ちはずっと、わたしの胸の中にあつて。

だから加奈実の応援もあり、わたしは戸野上君を呼びだすことに成功したんだ。

「花織さん」

気が付くと、前に戸野上君が立っていた。

途端に、心臓がうるさく鳴る。

「話つて、何かな？」

いつもの話し方なのに、その問いかけに上手く答える自信がない。

今のわたしは、緊張で顔がほてっていて、とにかく「ちゃんと言う事」しか頭にないのだ。

でも、声を発した途端、そんな意識さえも、どこかへとんでいった。

「あ、あのっ！」

初めて話したときから、気になっていました。

優しい笑顔に惹かれました。

とても素敵な人だと思いました。

言いたかったこと、心にあったこと。

全てが、この言葉に込められる。

「好きです」

その言葉を自分の耳で聞いてから、わたしはしばらく思考がフリーズしていた。

今の「好きです」は、わたしが言ったものじゃない。

でも、この場にいるのは、わたしと戸野上君の二人だけ。という事は……。

「俺、ずっと花織さんの事気になってた」

どういう事が、まだ状況がのみこめていないわたしを、平然とした様子の戸野上君は、強い力で抱き寄せた。

「きゃっ！」

わたしは背中から、戸野上君の胸の中に激突した。

「い、痛い」

思わずもらすと、低い声が、上から降ってきた。

「ゴメン、強引な事して……。でも、こうでもしなくちゃ、俺の想いは伝わらないと思った。」

「戸野上君……」

「俺、本気なんだ。それだけは、わかってほしい」

戸野上君は、真剣だ。

初めて感じる戸野上君に、少しだけドキドキする。

「返事、くれないかな？」

でも、その声と告白を聞いて、だんだんとうれしさが募ってきて。

わたしは、先に言われてしまったセリフを、これ以上ないくらいの、大きな声で返した。

「好きです！ 大好きです！」

今まで重ねてきた、いつぱいの気持ちを含めて。

しかし、言ってしまったから、後悔した。

わたしは、抱き寄せられているせいで、戸野上君の目じゃなくて、壁に向かって「大好きです」と言ってしまったのだ。

相手の目を見ていないから、今発した言葉に対し、やけに冷静な考えをはじき出す。

そして、とてつもない恥ずかしさを感じた。

だけど戸野上君は、そんなわたしを向かい合わせにすると、わたしの真っ赤な顔を見つめて、笑った。

ああ、その笑顔に弱いんだ。

夕日に染まった戸野上君の顔は、いつも以上に優しい顔で、

夕日に負けないくらい明るい声で、言ったんだ。

「　ありがとう、桃」

Sweet Christmas

「桃、おいしい?」

わたしが大好きな、白いクリスマスツリーや、様々なイルミネーションで彩られたレストランの中、わたしは恭君と二人でケーキを食べていた。

「おいしい!」

お世辞じゃなく、すごくおいしい。

クリームは甘ったるくないし、フルーツはちょうどいい甘さでおいしい。

「桃は、本当に甘いもの好きなんだな」

わたしの表情を見て、恭君が優しげに笑う。

もちろんだよ、と返事をしようとして、かたまった。

「桃、あーん?」

恭君がわたしに、一口分のケーキを近づけたから。

途端に、ぽかんと口を開けたまま、顔が真っ赤になる。

「可愛いな、桃は」

そんなわたしに、恭君は笑ってケーキを食べさせてくれた。

キレイなツリーより、甘いケーキより、

わたしは彼氏が大好きです。

小さな想い

今、時間ある？

冬休み中の、ある日の事。

わたしの名前は、相沢^{あいざわ} 加奈実^{かなみ}。

現在、高校一年生だ。

忙しいわたしたちには、ありがたい長い休み。

家でまったりしていたところに、突然彼氏のユウヤから電話がかかってきた。

「あるけど……」

話があるんだ。今ちょうどマンションに来てるから、下に出てきてくれない？

「うん、わかった」

ケータイを閉じてから、コートを羽織って外に出る。いつもより、風は冷たい。

エレベーターを降りるとすぐに、ユウヤの姿を見つけた。

「ユウヤ！」

振り向いたユウヤの元に、小走りで向かう。

「話って？」

ニコニコ笑いながら、ユウヤに聞く。

だけど、言われた言葉は、わたしが一番聞きたくなかった言葉だった。

「加奈実、別れてくんない？」

ユウヤが唐突に言った。

「えっ……なんで、いきなり？」

あまりにも突然の申し出に、びっくりして、わたしはあわてた。

「わたし、ユウヤに何か悪い事したかな？」

考えるより先に、口が動いていた。

「ユウヤが別れたたって思うような事したかな？ 身に覚えがないよ。ちゃんと行って……」

「それだよ」

ユウヤは、はっきりと言って、そんなわたしを指さした。

「重いんだ、そういうの」

「お、重いって?」

自分でもわかるほど、動揺して声が裏返る。

「俺は、加奈実の事好きだよ。でも、加奈実は俺が『好き』って言うっても、信じてくれないし、ケンカしたら、すぐ自分を責めるし、そういうのが重いんだよ」

「で、でも……」

「とにかく、俺たち、終わりにしよう。このままじゃ、お互い疲れ
る」

「……」

「じゃあな」

去っていくユウヤに、何も言えなかった。

引き留める事もできなかった。

一人になってから、急に涙がこぼれる。

「ううっ、ひっ……く……」

わたしは、そんなにユウヤの負担になっていたのかなあ？

ただ、「加奈実が好き」って言ってほしかった。それだけなのに、
とめどなくあふれる涙が、頬を濡らす。

周りに誰もいないのをいい事に、わたしはずっと泣いていた。

するとしばらくして、誰かに声をかけられた。

「おい」

はっとして顔を上げると、わたしの前に、年下で幼なじみの、比護
透理とつりが立っていた。

「と、透理じゃない。どうしたの?」

わたしは、泣き顔を見られないようにと、とっさに顔をそむけ、透
理に聞いた。

「別に。ただの部活帰りだけだ」

透理は、普通の顔をして言った。

確かに横目で見ると、学ランを着ている。

わたしと透理は、三歳差。

だから、わたしが高校一年生ということは、透理も中学一年生になったというわけで。

去年は受験で忙しくて、ほとんど透理に会っていなかったから、ずいぶん久しぶりだ。

せっかくの再会だけど、失恋したばかりのわたしは、あまり余裕がなく。

「じゃ、これで……」

と、透理から逃げようとした。

しかし。

「待てよ、加奈実」

透理に腕をひかれ、思い切り向かいあう形になってしまった。

逃げない方が、よかったかも。

「……お前、泣いてただろ？」

鋭い観察力。

だけど、どうしても透理にだけは、失恋したってバレたくなくて。

「な、泣くわけないでしょ、このわたしが！ もう、失恋なんかしてないんだから！」

つい、あせって余計な事を口走ってしまった。

「……失恋、したのか？」

案の定、透理はわたしの不自然な言動に気付いて。

わたしの目を、じっと見つめてきた。

「だ、だから違うってば。あんまり大人をからかうもんじゃないわよ、中学生さん」

あえてふざけてみたけど、そんな冗談も通用しなくて。

やがて透理は、ぼつりと言った。

「強がんなよ」

「つ、強がってなんか!」

「そういうのを強がってるっていうんだよ、高校生さん」

わたしの必死の弁解は、透理にそう言っただけで遮られた。

「まずは帰るぞ」

いつものまにか呼んでいたらしいエレベーターに、二人で乗り込む。

その空間が、どうしても狭く感じ、居心地が悪くなって身をよじらせた。

チンツ

小さい音をたて、7階でエレベーターがとまった。

わたしの家は704号室で、透理の家は705号室。手前の方がわたしの家だ。

透理は、わたしの腕をひいて、わたしの家の前まで行く。

しかし、そこで腕は離れず、透理はわたしを引っ張ったまま、自分の家の鍵を開けた。

「ちよつと、透理……」

「いいから黙ってる」

少し抵抗したが、まったくかなわず、結局透理の家の中に入ってしまった。

透理の家族をさがしたが、見当たらない。

案の定、透理から言われた。

「今日は俺一人だ」

透理は中から鍵を閉め、嚴重にチェーンまでかける。

そしてわたしを、『透理』と書いてある部屋に連れ込むと、また部屋の鍵を閉めた。

「な、何するつもり?」

声が裏返る。

しかし透理は冷静な態度で、わたしを床に座らせた。

そして自分も向かい合わせになると、いきなりこう言った。

「俺、知ってるから。加奈実に彼氏ができたのも、加奈実がそいつを大好きだったのも」

透理の言っている事が、よくわからない。

どうして？ わたしに彼氏がいるって、誰から聞いたの？

「彼氏と一緒に帰ってるのとか、見たから」

うっ、と言葉につまる。

そういえば、わたしが一緒に帰りたいつて駄々こねて、そんなこと
もしてもらったっけ……。

だけど、そういう事が、ユウヤには重く感じたわけで。

「今日、帰ってきてそいつを見てさ。電話で『別れた』みたいな話
してるの聞こえたから、もしかしたら思って思ったんだ。そうしたら、
エレベーターの下で加奈実が泣いてるし。一発でわかるだろ」

「嘘っ……」

じゃあ透理は、わたしが変な事言う前から、わたしが泣いていた理
由、知ってたんだ……。

「俺さ」

すると、いつになく真剣な表情で、透理が切り出した。

「加奈実の強がっちゃうところとか、絶対に悲しんでる場面を人
に見せないところとか、ずっと近くで見えてきたから、よくわかってる
でも、俺はもつと、加奈実のいるんなところを知りたい。強いだけ
じゃなくて、弱いところとか、つらいところとか、そういうもの全
部ひっくるめて“加奈実”だろ？」

「弱いところ……」

「……だけど俺は年下だから。加奈実には口が裂けてもそんな事言
えなくて、何もできなかった。でも、今日こういう場面見ちゃった
ら……」

そこで透理は、わたしの髪を手ですくって、そっと落としていった。
胸がドキドキして、鼓動が熱い。

「なあ、加奈実。俺じゃだめかな？」

「だ……だめって？」

「俺が加奈実のそばにいて、加奈実を守ることは、できない？」
顔が、近い。

熱い吐息が、わたしの頬にかかる。

「今言うなんて、卑怯だと思ってる。でも……」

わたしの肩が、透理の腕に包み込まれる。

「俺は、小さい頃から、ずっとずっと加奈実の事好きだった……」

「……っ！」

「俺と……付き合って？」

『好き』

『付き合って』

透理から言われるなんて、思ってもいなかった言葉。

だけど、透理はわたしを想って、告白してくれたんだ。

優しい。うれしい。

でも、優しいからこそ、わたしは言わなくちゃいけないんだ。

「わ、わたしは……」

「ん？」

「ユウヤに……『重い』って言ってフラれたんだよ……？ わたしのする事は、男子には重いって……」

うれし涙なのかな？ 悲し涙なのかな？

まばたきをするたびに、透理の手にわたしの涙が落ちる。

「だから、わたしと一緒にいても、透理は幸せになれない……」

だけど透理は、必死に言葉を紡ぐわたしを、ぎゅっと力を入れて抱きしめると、横から顔を近づけてきた。

「でも……」

「大丈夫だから」

透理は、わたしを癒してくれる、幼い頃と同じ笑顔を見せながら、そっとわたしにキスをした。

「それなら、俺が加奈実を幸せにしてやるよ」

Love Christmas

「はい、プレゼント」
クリスマス。

わたしと透理は、透理の部屋で、二人っきりのクリスマスを過ごしていた。

「開けていい？」
「うん」

透理が開けた箱から出てきたのは、わたしが友達の桃に手伝ってもらいながら、心をこめて編んだセーター。

「コレ、もしかして加奈実が作ったの？」

「友達に、作り方だけ教えてもらって、編んだのは全部わたしだよ」
「うわ……やべ、超うれしい。ありがとう」

思った以上に喜んでくれて、あげたわたしが感激してしまった。

「ううん。こちらこそ喜んでくれてありがとう」

「じゃ、俺からのプレゼントだな」

そう言っ透理は、ベッドの下から、ラッピングされた小さな箱を取り出した。

「加奈実の趣味か、わかんないけど……開けてみて」

めずらしく自信なさげに言う透理を「可愛い」と感じながら、言われた通りにリボンをほどく。

中に入っていたのは、小さいハートが二つついた、ネックレスだった。

「すごい、こういうの欲しかったんだ！」

わたしはうれしくて、思わずぴよんぴよんはねてしまった。

「ありがとう、透理！」

まだまだ興奮が冷めなくて、しばらく部屋を動き回っていたら、透理に呼ばれた。

「もう一個、あるんだけど」

「何が？」

「プレゼント」

「えっ？」

無愛想な透理の顔が、今度は真っ赤だ。

目をぱちくりさせていたら、透理がわたしの頭を引き寄せた。

「あっ……」

わたしの唇と、透理の唇が触れる。

透理、安心して。

照れ屋の透理が、“愛してる”って、小声でささやいてくれたの、
気づいてるよ。

恋色 memory

“写真部”と、上の方に書かれたドアを、そっと開けて中に入る。室内にはいつも通り、机の上に、二つのデジタルカメラと、表紙の白いアルバムが置いてある。

アルバムには、この前の文化祭の時の写真が、いくつか入っていたと、その時。

「舞ちゃん、遅かったね」

声をかけられてドアを振り向くと、現像した写真を何枚も持った先輩が、笑っていた。

「すみません。ホームルームが長引いてしまっ……」

バッグを床におろし、少し頭を下げると、先輩はわたしの頭をポンとたたいた。

「謝らなくていいよ。あの先生、ホームルーム長いもんね。特に、冬休み前は」

写真をテーブルの上に置き、牛乳パックに入ったコーヒー牛乳を飲みつつ、雑談に入る先輩。

「はい……まあ冬休みは、夜遅くまでうろろろするカップルも、出てきますしね」

「おいおい、舞ちゃん。ひがんじゃだめだよ？」

「ひがんでません。わたし、恋愛に興味ありませんから」

意地悪く笑う先輩から、ぷいっと顔をそむけるわたし。

ひがみなんかじゃない。これは、本当の話。

わたしは、男子が苦手だ。

いつも騒がしくて、何でもがさつで、おまけに下品で。

中学生の頃に、同級生の男子にスカートをめくられたことが、トラウマとなっている。

だから、クラスの男子にもよっぱどの事がない限り、近づかない。いや、近づけない。

そんなわたしが唯一話せる男子が、三年生のこの先輩　小野寺
大輝だ。たいき

「舞ちゃん可愛いんだから、すぐに彼氏できると思うよ?」

「無理です」

先輩のお世辞をばつさり切り捨て、さつき先輩が持ってきた写真を見る。

「この間の、二人で紅葉見に行った時の写真ですね」

「うん。これも、アルバムに貼ろうと思っただけ」

そう言っただけ先輩がおもむろに広げたのは、机の上に置いてあるアルバム。

これは、わたしと先輩が写真部の活動として、二人で出かけて写真を撮った時の記録だ。

“写真部”の部員は、現在わたしたちだけだから、アルバムにいるのは、わたしと先輩の二人だけ。

「やっぱり部員少ないですね」

つぶやきながら写真を貼っていると、先輩はにっこり笑った。

「でも、舞ちゃんと俺だけのアルバムができたことは、うれしいな」
ドキン。

先輩が笑ったとたん、わたしの胸の鼓動が早くなった。

何も気づいていない先輩は、楽しそうに写真を眺めている。

(な、何なのコレ……)

動揺を悟られないように、わたしは手元の写真を、バカみたいにいねいに貼った。

その翌日。今日から、冬休みだ。

しかし、「冬休みは、明日一日だけ活動しよう」と先輩に言われたので、家族が休みだからと寝ている中、制服に着替えて自転車に乗って学校に行き、一人で部室に入った。

先輩はまだ、来ていないらしい。

昨日新しく写真を貼ったアルバムを見ながら、先輩が来るのを待つ。

写真は、風景のものが多く、ところどころにわたしの写真、先輩の写真、二人で映った写真もある。

紅葉を見に行った時はとても寒くて、わたしは先輩に手袋を貸していた。

そうしたら帰り際、「お返しにあげるよ」と、貸していた手袋とともに、あたたかいマフラーをプレゼントしてもらったのだ。

今もそのマフラーは、大切に持っている。

そのことを思い出していたら、また昨日と同じドキドキが鳴った。

「また……これだ」

舞ちゃん、寒い思いさせてゴメンね。

お返しにあげるよ。俺から舞ちゃんへの、ささやかなプレゼント。

どうしてこんなにドキドキするの？

これじゃあまるで、わたしが先輩に恋してるみたい……。

「えっ!？」

自分で考えて、自分でびっくりした。

「まさか、わたしに限ってそんな事!」

だけど、先輩との思い出を思い返すたび、このドキドキはどんどん強くなる。

嘘だ、嘘だと否定したい自分と、確信に近いものを感じている自分
の間で、激しく揺れる。

「わたしが、大輝先輩を……」

そこまで考えた時。

部室が開き、大輝先輩が入ってきた。

「おっ! 舞ちゃん、今日は早いんだね」

「冬休みですから。ホームルームはありませんし」

「ははっ、そりゃそうだ」

いつも通りに笑う大輝先輩。

だけどその後ろから、キレイな女の人のがぞいている事に、わたしは気づいた。

「大輝、もしかしてこの子？」

その人は、美人な顔立ちにとてもよく似合う、ソプラノボイスで先輩に聞いた。

「そうだよ、ミキ。俺達の二個下の後輩で、舞ちゃんっていうんだ」

「へー、そうなんだ。おはよう、舞ちゃん」

ミキと呼ばれた女の人は、にこっと笑った。

その優しい笑みは、大輝先輩にそっくり。

「ゴメンな、舞ちゃん。こいつがどうしても来たいっていうから、来ちゃった。なんか、俺と舞ちゃんが二人なのが、心配なんだって」「わたしは大輝を心配してるの！ それで、わざわざ来てあげたんでしょが」

言いあう二人は、どことなく楽しそう。

どこからどう見ても、お似合いのカップルだ。

気が付くとわたしは、こぶしをかたく握りしめていた。

「……舞ちゃん？」

わたしの雰囲気気付いたのか、先輩がイチャイチャするのをやめた。

本当は、二人の事を気遣って、「お邪魔なので出ますね」とか言わなくちゃいけないんだろうけど、わたしにはそんな事、できない。ましてや、自分の気持ちに気付いてしまっただけから。

握っていた手をさっと開き、わたしは立ち上がった。

今言わなきゃ、きつと後悔する。結果はどうなってもいい。ただ、決意を込めて。

「大輝先輩」

「は、はい」

いつにもなく静かなわたしの声に、大輝先輩は背筋をのばした。

「……好きです」

今までに言った言葉の中で、一番震えてたんじゃないか、ってぐらいの声だった。

いきなりの告白に、大輝先輩とミキさんは、目を丸くしている。

OKのわけは、ないだろう。

こんな事彼女さんの前で言っ、大輝先輩に、怒られるかもしれない。

でも、昨日「舞ちゃんと俺だけのアルバムができたことは、うれしいな」って言ってくれて、すごくうれしかった。

その前から少しずつ少しずつ重なっていた想いが、きつとあの時あふれたんだ。

「大輝先輩」

もう一度、最後になるかもしれない名前を呼ぶ。

しかし……。

「舞ちゃん、それは俺が言いたかった」

大輝先輩から聞こえてきた言葉に、わたしは目をまるくした。

「……え？」

「先に言っなよ。それじゃあ、何のためにミキを呼んでまで部活にしたのか、わかんないじゃん」

「はあ？」

ポカンとするわたしに、ミキさんが笑う。

「舞ちゃん、ややこしいこととしてゴメンね。ちゃんと、この意気地なし弟に説明させるから」

「お、弟？」

「そうよ。なんか勘違いさせたみたいだけど、わたしの名前は、小野寺 美輝^{ミキ}。大輝の、実の姉です」

「じゃ、じゃあ、大輝先輩とミキさんは、姉弟？」

「ええ、その通りよ」

彼女じゃないんだ……。

知った途端、急に脱力してしまい、わたしは椅子に座り込んだ。

「ま、舞ちゃん、とにかく、話聞いてくれないかな？」

急にあたふたする先輩と、その様子を笑いながら見るミキさん。

「はい。聞きます……」

こんなに頑張っ告白したのに……。

「あのさ……」

つまり、こういうことらしい。

先輩は、今日わたしに告白しようと試み、姉であるミキさんに協力を得て、わたしを部室に呼びだした。

そこで折を見て、告白する手はずだったのが、急にわたしに告白され、混乱して焦った。

「……という事は？」

「俺も舞ちゃんの事、ずっと好きだった
顔を真っ赤にして告白してくれる先輩。」

わたしにマフラーをくれた時は、こんなに緊張してなかったのにな。さつき自分がすごく緊張していたのも忘れて、わたしはミキ先輩と一緒に、笑ってしまった。

「な、なんだよ」

「だって、先輩……今までにないくらい顔が赤いから……！」

「う、うるさい。暖房効きすぎなんだよ、この部屋」

「弟よ。残念ながら、暖房入ってませんよ」

「マジかよ！ 舞ちゃん、入れとけよ！」

言い訳できなくて焦る大輝先輩が、すごく可愛く見えた。
可愛いだけじゃない。“愛おしい”。

「舞ちゃん。大輝が不憫だから、返事してあげて？」

「不憫とか言うな！」

膝をバシバシ叩きながら笑うミキさん。

どうやら、よっぽどツボに入ったようだ。

わたしはそんな二人と一緒に笑いながら、大輝先輩に椅子ごと近づいた。

そして。

「……わたしと、付き合ってください」

二人だけのアルバムは、これから恋色の写真で埋め尽くされそうです。

Happy Christmas

「ちょっと、大輝先輩。どこまで行くんですか？」

「舞ちゃん、早くおいでよ。本当にすごい景色見られるから！」

興奮しながらわたしの前を歩く大輝先輩と、カメラや撮影器具を持ちながら歩いて、疲れ果てたわたし。

いろんなところを撮影したけど、最後のスポットだけに、まだ行けない。

しかも、ここに来る前に行った場所を出てから、十分以上歩いたのに、だ。

「休憩しませんか？」

「もう少しだから、頑張つて！」

ファイト、ファイトと明るく言いながら進む先輩は、小さな子供のようだ。

高校三年生とは、とても思えない。

でも、そんなところに、惚れてしまったわけで。

「着いた、舞ちゃん！」

そんな事を考えていたら、大輝先輩に腕を引っ張られた。

「あつ、ちょ……！」

バランスを崩して倒れそうになった時、強い力で元の体勢にもどされる。

そして戻った視線の先には、大きな大きなクリスマスツリーがあった。

実際は、ただの公園の木。だけど、その隙間から町の彩られた光が差し込んだため、ツリーのような輝きを放っている。

「……本当だ、キレイ」

わたしがつぶやくと、大輝先輩は得意げになった。

「だろ？ 俺、超頑張つて、舞ちゃんのためだけに、ここ探したから」

へへつと笑う大輝先輩。

素直に、その想いがうれしかった。

「ありがとう。最高のクリスマスプレゼントです」

わたしは、正直にそう言い、ニッコリ笑って、大輝先輩の首に手をまわした。

「わあっ！」

あわてふためく先輩。だけど、それにもお構いなしで、わたしは先輩の頬にキスをした。

先輩は、しばらく放心状態だったけど、やがてぼつりとつぶやいた。

「幸せすぎて、ヤバいっつーの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8154z/>

聖夜のラブストーリー

2011年12月25日23時51分発行